

生きること支援

～食事作りを通して～

徳島県 グループホーム 親の家
介護福祉士 佐川 美幸

<はじめに>

グループホーム親の家は、平成17年12月の開設以来、『入居者は、介護を受ける人ではなく生活の主役である。』『入居者の心の動きに共感し、ありのままを受けとめる。』の2つの柱を基本方針に、入居者のリズムに合わせ、高齢だから認知症だから管理が必要と言う前に、生きる喜びやエネルギー消費等を考え、あたりまえの生活を支援している。《親の家》の生活の中では、様々なその人らしく生きる入居者の姿がある。今回、その中で食事作りを通して気づいた事を報告する。

<取り組み・気づき>

《親の家》の食事は、献立を決める事から始まる。入居者の様子を見ていると、献立を上手くイメージ出来ない、他の人に気遣う、お金を気にする、人任せ、「何を食べるか。」と聞かれても具体的に思い描くことが難しくなっている。私たちは、それぞれその時々に合わせて、内に秘めたものを引き出す事、入居者の頭の中に閉ざされているメニュー表を引き出す事、新しい食べ物に出会う機会を作る事など、献立を決める過程の会話を大切にする事で、献立が自然に決まって行く。

献立が決まり、いざ買い物へ。《親の家》の買い物は、毎日昼・夕2回車や徒歩で行く。店に入ると、「何買うん。」と、ふと思いだされる入居者。こんな大事な事を忘れてしまうのに、安い物を選んで買う事や探している物が見つからない時は、店員を見つけ尋ねる事は忘れない。

食材選びも終わり、レジへ。財布を預けると、店員に告げられた金額を財布から探す。小銭の勘定が思うようにいかないが、レジの人が「ありますか。」など声を掛けて助けてくれる。やっと支払いが終わり、買った物を買物袋に入れる。「あー、重た。」と一人が言うと、もう一人が自分の持っていた軽い方の袋を渡し、自分が重い袋を持つ。それぞれ入居者が片手・両手にと買った物を持ち帰る。自分が持ち帰る為に行動するのは当たり前で、大切な生活力である。社会との繋がりを持つ機会を大切にする事で、日常の何気ない一場面であ

るが、人として生きる姿や人と人との互いに助け合う姿がそこにはある。

買い物から帰ってくると、早速調理に取りかかる。食材を見ただけでは調理に結びつかないが、具体的な言葉を掛ける事でイメージ出来、食材を切り調理が進んで行く。やりたくない人やさぼろうとする人、人に指図する人、嫌な事はしないが好きな事は人がやっているのを取り上げてでもやる人などさまざまである。調理方法の違いや考え方の違いで喧嘩もする。人は、「おかしい。」と思ってもそれを口に出せない事が多い。それが原因で体調を崩したり病気になる事もある。そう考えれば、ストレートにそれを出せる入居者は素晴らしい力がある。思った事・感じた事をストレートに表現出来る事は大切に喧嘩をしている姿も素敵に見える。キッチンには朝に昼に晩に賑やかな場所になる。

<考察・まとめ>

私たちは意識したり気づいたりしていないが、生活の中で同じ事を繰り返す事で失わず維持出来ている事がたくさんある。入居者は、ちょっとした繰り返しでは維持したり身についていけないが、『繰り返し』を繰り返す事で可能になる事もたくさんある。「繰り返し同じ事を言う」事が問題とされるが、『繰り返し』を続けていけば、『繰り返し』も問題ではなく、素晴らしい自信の素である。説明しても理解出来ず、とんちんかんな言動もたくさんあり、周囲から見れば迷惑である事は間違いない。でも、私達が「迷惑な存在。」と置いて入居者からドキドキ感もハラハラ感も奪ってしまうと認知症老人として閉じ込めてしまう事になる。以前働いていた病院には、認知症の方が多く入院されていた。徘徊・一人で外に出る・介護への抵抗・大声を出す・昼夜逆転・せん妄などの行動障害があり、周りから見れば、その事が問題に見え、迷惑になるので対応策を考えていた。しかし、《親の家》では、行動障害を問題だと思いう事に問題があると気づかされた。その行動には必ず理由がある。理由を探り、原因を見つけサポートする。混乱した不安な心が落ち着けば、私達と同じ心を持った人として普通の生活が出来る。心が動けば、体も動く。人は、いくつになっても出来る限り、自分の事は自分でしたい、人に迷惑を掛けたくないと思っている。それが生きる姿である。親の家の入居者も同じで、入居者同士・入居者とスタッフ・入居者と家族など人と人との助け合って、また社会と繋がって、自分の能力に応じて自立的に生きている。その中で、ぶつかり合ったり、とんちんかんもあるけど、そこにこそ人間らしさがある。人間らしく生き生きと生きている入居者を、これからもサポートしていきたい。